

第8回野上紘子記念賞 学会賞

岡野裕行氏 受賞記念インタビュー

『文学館出版物内容総覧：図録・目録・紀要・復刻・館報』の編者として、野上賞学会賞を受賞した岡野裕行氏。受賞を機に106館の出版物、約9,400点を収載した本書の出版の経緯や、文学館研究の嚆矢でありながらも専門に捉われない、幅広い活動について聞いた。

出版は編集者との共同作業、理解者がいて良かった

——今回の受賞対象となった本書のものは、筑波大学に提出された博士論文だそうですね。

岡野 はい、ベースとなったのは2006年に提出した博論の資料編です。資料編を先につくり上げて、それをもとにした分析を本編として書きました。資料編はほぼ1年間の時間をかけてデータをまとめました。博論の時点で約6,300件、出版の際には追加データを加えて約9,400件までいっています。

出版社の人は、私の博論を筑波大学のリポジトリで偶然見つけたそうです。博論のデータは2005年現在の状態で古びてしまっていたこともあり、出版にあたってそのままでは出せないということで、その後の数年分を追加しました。追加分の再調査については、ほとんど出版社の方にお任せしています。

——タイトル自体も増えているのでしょうか。

岡野 細かいところは把握できていないですが、収録件数から見ても増えてはいますね。博論で基本の形ができていたので、編集の方にはそれをより見やすいようにデザインし直してもらいました。索引づくりも全部お任せしたので、編集者とはできたものの内容を相互にチェックしてまとめました。

博論を書いていたときは完全に個人作業でしたけど、今回の出版のときは編集者との共同作業になりました。担当の編集者が図書館情報学を学ばれた若い方で、お声がけいただいたときには「理解者がいてくれて良かった」と嬉しくなったことを覚えています。編集者には2011年11月の図書館総合展でご挨拶いただいたのが最初の出会いです。その後、2012年7月に出版の企画を立てているとのご連絡をいただいて、そのままメールや電話で話を詰めていきました。博論の調査で集めた膨大な資料の原本やコピーを全部編集者にお預けして、2012年度中に一気に作業していただきました。2012年11月の図書館総合展の際にも直接打ち合わせをして、ようやく形になったのが2013年4月です。

——企画からわずか10か月ほどのスピード出版ですね。購入された方や利用者の話を聞く機会はありましたか。

岡野 知り合いからは「分厚すぎ」とか「この分量をよくまとめたね」と言われました(笑)。あとは「分類番号に迷った」という図書館員ならではのコメントもいただいたことがあって、これは類書がない分野なんだということが伝わってきました。ほかには全国文学館協議会の方からも祝福のコメントをいただいています。今度の10月に山形県の遅筆堂文庫で全国文学館協議会の会合が開催されるのですが、そこにお招きいただき、今回の出版の経緯を含めて文学館についての発表をすることになりました。全国文学館協議会には博論執筆のときにも何かとご協力をいただきましたが、こういう形で改めてお話する機会をいただけるのはとても嬉しいです。

調べ物をするための本なので、どうしても図書館での購入がターゲットになりますから、使い勝手などの反応は、長い目で見て待つしかない気がしています。ですので、今回いただいたJADSの野上賞がこれまでで一番の大きな反響になると思います。

地道に収集、複写依頼しまくる日々

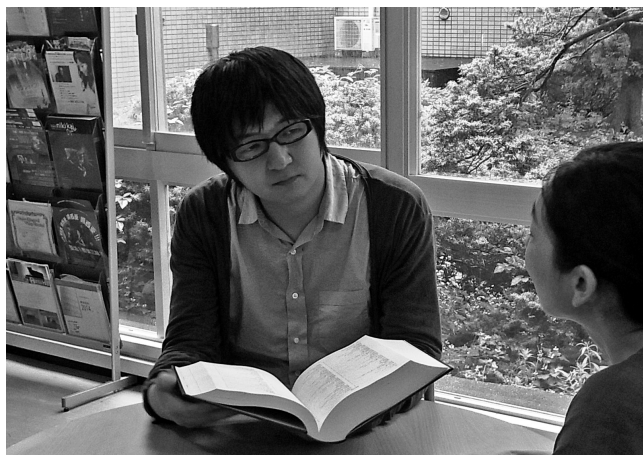
——約9,400件のデータが実際にあの形になるまで、どのような調査をされたのでしょうか。

岡野 これはもう「地道に収集してきた」としか言いようがないですね。何をもって文学館と呼ぶのかという定義が難しかったところもあって、とりあえず大まかな枠組みを「全国文学館協議会に加盟している施設を文学館と呼ぶ」と定義して調査対象を決めました。「加盟していないところは文学館ではない」と言いたいわけではないのですが、どこかに線を引いて定義づけしないと研究を進められなかったのです。

博論を書いていた時点での協議会加盟館が82館で、そのうち出版物を出しているのは76館でした。出版物を一切出していない文学館もあったので、調査の初期の段階で「館ごとの特色は思っていたよりも異なりそうだ」という予感がありました。研究を始めた時点で既に訪れていた文学館もいくつかあったので、図録を買ったりはしていました。あとの足りない大部分の資料については、筑波大学の附属図書館からひたすら文献複写を依頼し続けるという日々でした。筑波大学附属図書館の職員さんにはとても感謝しています。

——文学館の図書室や資料室は、OPACを公開しているところが多いんですか。

岡野 現在も多いとは言えませんが、当時は今以上に整備されていませんでした。ですので、各文学館のOPACで足りないところは、国立国会図書館のNDL-OPACや雑誌記事索引などを活用しました。それでもOPACでは出てこない資料もあったので、日本近代文学館や神奈川近代文学館などの規模の大きいところを中心に、行ける範囲でひたすら現地の施設



『文学館出版物内容総覧』を手にする岡野裕行氏（左）
（2014年6月7日、上野・東京藝術大学にて。撮影：橋石もも子）

に赴いて資料調査してきました。

——まず、所蔵の確認自体が難しかったということですか。

岡野 そうですね。ウェブから調べて文献複写だけでは多少の漏れも出てきますので、そこを補完する作業が必要でした。遠方の文学館だと現地へ行って確認するのも時間や予算の関係で難しかったので、確認したデータを仮のものとしてひとまずまとめて、それを各文学館へお送りしてチェックしていただきました。ウェブでは見つからなくて、この作業で明らかになったデータも結構ありました。いきなり「全部教えてください」とお願いするのは失礼ですので、まずは自分である程度のリストをつくってからお願いしました。

——それはあちらにとってもメリットですね。今までにどんな物をどのくらい出しているのか、自館の出版物の全体像は意外と把握できていないものだと思います。

岡野 設立年が古くて活動の年月が長い施設だと、特にそうなりますよね。初期の活動を支えてきたベテランの方がいなくなると、それまでの軌跡が分からなくなることも多いでしょうし。

博論を書いていた頃は、まだ文学館の研究というのが形になっていなかったの、「うちの館を調べてどうするの?」と不審な受け止められ方をされたこともありました。「文学を研究する」なら理解できるけれど、「文学館を研究する」というところがどうも理解されづらかったように思います。自館の活動が研究対象になるというのが不思議に思えたんでしょうね。

——出版の際、工夫したことはありますか。

岡野 博論の時はWORDでデータをまとめていたこともあって、レイアウトに不満が残りました。提出までの時間的な余裕もなくて、レイアウトの改善にまで踏み込むことができなかったことが心残りでした。今回は出版社に任せたことで、プロの方にレイアウトをしていただけたことが良かった

と思います。索引についても、博論のときよりも格段に見やすく整備していただきました。

博論の提出から数年の時間が経ちましたので、客観的に自分の過去の仕事を振り返ることができたことは、結果的に良かったように思います。博論を出してすぐに出版できていたとしたら、勢いのままに不十分な状態でまとめていたかもしれません。当時は「文学館の研究をやる意味がよく分からない」という雰囲気でしたから、もしあのタイミングで出版していたら、特に話題にもならず埋もれた可能性もあります。このタイミングで本を出せたのは、こういう分野に対する研究の必要性が高まってきたことを感じます。

結果として、ほかの人が思いつかなかったテーマだった

——別の角度からお聞きします。『三浦綾子書誌』（勉誠出版、2003）は修論の資料編、『三浦綾子：人と文学（日本の作家100人）』（勉誠出版、2005）は修論の本編と、岡野さんはもともと文学の研究をされてきたわけですね。

岡野 アウトプットの順番からいくと、そういう風に見えますね。ただ振り返ってこれまでの歩みを考えてみると、私は文学研究そのものを既にやってないですね。経歴としては学部からずっと図書館情報学を専攻していて、文学をしっかり学んでいるわけではないですし、文学研究者を名乗るのはやはりどこか居心地の悪さを感じます。とはいえ、三浦綾子研究に取り組んだ経験がなければ、自分のなかに文学館というキーワードが出てくることはなかったの、これも大事なプロセスのひとつですね。

もともと文学に興味があったこともあって、学部の際に取り組んだ卒論では、太宰治をテーマに選んで文学研究のようなことを行いました。とはいえ、さすがに修論では文学研究を図書館研究の枠組みの中でやるためのキーワードが必要ということになり、それが“書誌”だったわけです。“書誌”だったら文学研究にも関わるし、図書館の研究らしくもなるので、両分野を学際的に繋ぐことができるだろうという判断がありました。1998年に開館した三浦綾子記念文学館に2回訪れ、そこでひたすら文献調査をして修論の資料編をまとめました。

修論執筆のときには“書誌”というキーワードしか見えてなかったのですが、そのときの調査の経験は後々に引っかかってくるものがあって、博士後期課程に進んだ段階で「文学館は文学研究者にとっての専門図書館ではないか?」と思うようになり、“文学館”というキーワードが浮かび上がってきました。これを研究キーワードに据えれば、文学と図書館の繋ぐようなものが見いだせるのではないかと考えました。図書館情報学を学んでいたのに、文学の世界に飛び込ん

でみて、改めて図書館の世界に戻ってこようとしたら、“文学館”というキーワードがついてきたという流れです。

——当時は大変だったのではないですか。よく「先行研究のない研究はするな」と言われますよね。

岡野 道がないところを突き進んだ感じになりましたが、当時はほんとうに何も考えていませんでした。今考えると怖いことをやっていたんだなと思います（笑）。でもこうして高く評価していただけるようになりましたので、結果として良かったと思います。

私が学んできた図書館情報大学は、いろんな分野のご出身の先生がいらしたのですが、それでも大学全体としては“図書館”というキーワードに収斂されていくような教育がされていました。とりあえず“図書館”に絡んでいれば、どのような研究テーマでも許容されてしまうような、おもしろい雰囲気のある大学でした。今では既にご退職されている方も多いのですが、私たちの世代は、そういう他分野からいらしていた先生方がまだ現役で教壇に立っていらっしゃいました。私の指導教員はもともと文学の人なので、図書館の研究よりも文学の研究の方に力を入れるように指導されたりはしました。でも私としては、「文学だけだとさすがにちょっと…」と思うようになって、研究テーマを図書館寄りに引き戻しそうと考えました。“文学館”というテーマが思い浮かんだのは、「図書館でもなく文学でもなく」というところを考えようとした結果ですね。

JADSの活動にも絡むキーワードですが、私が博論を提出した頃とほぼ同じタイミングで、MLAという言葉をよく耳にするようになりましたよね。博論を書いていたときはそのキーワードを全然考えていなかったのですが、世の中にあの流れが来ていたことも大きいと思います。文学館の研究は、図書館の現在の課題にも深く絡むようなテーマだったことに後から気づきました。そういう意味でも、時代の流れもタイミングとして良かったのだと思います。

——最後に、これからのお仕事への展望を教えてください。

岡野 大阪府立国際児童文学館の移転問題や立原道造記念館の閉館などに象徴されるように、活動の縮小を余儀なくされたり、継続が困難になってしまったりする事例が出てきましたが、そういうのはやはりできるだけ避けたいことだと思います。文学館はもっと効果的に使える施設だと思いますし、そういう施設を活用した研究がもっと世の中に出てくると良いのではと思っています。文学研究者にもっと使ってほしいですし、文学研究活動を支援するための施設になってほしいと思っています。もちろん一般の人向けにも存在価値を発揮してもらいたいので、研究情報が文学館に集約されて、「このように使われています」とか「こういう価値があります」

という情報を発信していけるといいですね。

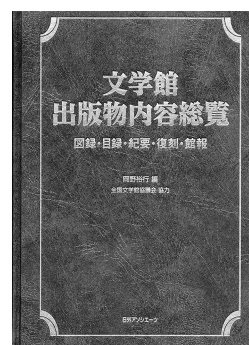
私自身は文学館そのものがもっと良いものになるように、研究の素地をつくっていききたいという思いが今現在は強いです。文学館研究ってほかにはあまりないだろうなと思いながらも、他大学の学生さんが卒論で取り上げたいらしいという噂はこちらの耳にも入っていて、「これは下の代にも続いていく研究テーマだ」という感触を得ています。ですので、そのための地慣らしが自分の仕事だという思いで研究に取り組んでいきたいと思っています。

また、ここ最近だと、観光学やツーリズムの研究者から問い合わせがあって、作品の舞台や作家の生家を観光資源にしたいと考えているまちづくりの人とも絡めそうだという予感があります。単に文学館という施設に限定した取り組みではなく、まちなかに点在する文化情報資源の活用という空間の広がりを意識した流れに研究の視点を進めていきたいと思っています。

2014年7月15日、スカイプにて
(聞き手・構成: 楠木あづさ、書き起こし: 菱村宏子、協力: 楯石もも子)

おかの ひろゆき

1977年茨城県生まれ。図書館情報大学を経て、2006年に筑波大学大学院図書館情報メディア研究科図書館情報メディア専攻博士後期課程を修了。博士（学術）。2011年より皇學館大学文学部国文学科助教。「文学館」「文学資料」「文学散歩」など、図書館と文学の二つの領域を繋ぐような研究テーマを追求している。著書に『三浦綾子：人と文学（日本の作家100人）』（勉誠出版、2005）、共著書に『デジタル文化資源の活用：地域の記憶とアーカイブ』（勉誠出版、2011）など。



文学館出版物内容総覧
—図録・目録・紀要・復刻・館報

岡野裕行 編
全国文学館協議会 協力
日外アソシエーツ, 2013

106の文学館の出版物9,387冊の書誌事項と目次を収録した内容細目集。文学館ごとに「図録」「目録」「紀要」「研究誌」「復刻」「館報」などを出版年順に排列。これまで網羅的に調べられなかった文学館出版物の詳細な内容が一覧でき、文学館の多様な出版活動をつかむことができる。「執筆者名索引」「作家名索引」付き。